津和野再訪

槌田満文

夏休みの終わりに、森鷗外の出身地――島根県津和野町を、三十年ぶりに訪れた。十一歳で東京へ出てきた鷗外は、死ぬまで一度も郷里へ帰らなかったが、遺言では「石見人森林太郎トシテ死セント欲ス」と述べている。臨終の鷗外がどんな心情にあったかを、その石見の地で考えてみたいと思ったのである。

私が初めて津和野へ行ったのは、昭和三十五年の夏だった。病没した岳父の納骨のために、菩提寺のある山口県徳山市へ出かけたのだが、ふと思い立って津和野までひとりで足を伸ばしてみたのである。しかし、汽車の乗り継ぎがうまくゆかず、ひどく時間がかかってしまった。

徳山から山陽本線で小郡へ行き、山口線に乗り換えて津和野まで行ったのだが、山口駅から先のトンネルをくぐるたびに、車内にSLの煤煙がこもって、ワイシャツが黒くなるのに閉口したことを覚えている。

津和野に着いたときは午後五時を過ぎていて、津和野大橋のそばの郷土館はすでに閉まっていた。町外れに近い鷗外旧居にたどりついたころは薄暗くなりかけていたが、品のいい老女が説明に当たってくれた。あとで知ったのだが、当時旧居に住んでいた森潤三郎（鷗外の末弟）夫人だったのである。

そのとき聞いた話で印象に残ったのは、鷗外が津和野から東京へ出てきたときかかった日数が、ドイツ留学で乗った船旅より長かったということだった。

年譜によれば、明治十七年八月二十四日に二十三歳の鷗外はフランス船に乗って横浜港を出発し、十月七日にマルセイユに着いているから、船旅は一か月半だったわけである。また、明治五年六月二十六日に典医だった父静男に伴われて出郷した十一歳の鷗外は、八月に向島の小梅にあった旧藩主亀井家の下屋敷に入った。八月何日かは不明だが、おそらく中旬以降で、一か月半以上はかかったのであろう。それほど津和野は交通が不便な、中央から遠く離れたところだったのである。

晩年の鷗外は、鉄道が開通したら帰ってみたい――と言っていたという。しかし山口線の津和野・石見益田間が通じたのは大正十二年四月で、鷗外はすでに前年の七月九日に六十一歳で没していた。

現在では、東京から津和野まで、飛行機を使って直行すれば四時間足らずで行ける。私

が初めて行った三十年前とくらべてみても、津和野はずいぶん変わっていた。史跡と鯉の城下町は〝山陰の小京都〟として、レンタサイクルで見て回るアンノン族が多い観光地となっている。また、昭和五十五年から復活したSL「やまぐち号」が〝走る貴婦人〟と呼ばれて定期的に小郡・津和野間を走り、SLマニアのノスタルジーを誘う。

今回は前夜、中原中也の生誕地跡や詩碑のある山口の湯田温泉に泊って朝早く出てきたので、時間はたっぷりあった。津和野川（錦川）の水が引かれた殿町通りの堀割は観光向きに整備され、色とりどりの大きな鯉が泳いでいる。堀割に沿った民俗資料館は、少年時代の鷗外も通った藩校養老館の跡で、白壁の御書物蔵の前には、三鷹市の禅林寺境内にあるのと同じ鷗外遺言碑が立っていた。

古い町並みが残っているのはこの殿町通りで、なかでも「高津屋」の看板を掲げた伊藤博石堂は、家伝漢方胃腸薬「一等丸」の製剤本舗として、薄暗い店内には今も明治初年の雰囲気を漂わせている。この伊藤家と鷗外旧居の関係は、津和野町教育委員会が昭和四十五年五月に建てた「文部省指定史跡森鷗外旧居」の説明板で知った。

「この家は、一家が上京した後、転々とその所有者がかわり、一時は森村の方へ移されていたが、昭和二十九年鷗外三十三回忌にあたり本町伊藤家（鷗外の幼少の折り父の使いでかよっていたクスリ屋）より寄贈を受け、もとの地に原型どおりに移築したものである」

旧居の前には、前回来たときにはなかった鷗外詩碑が建てられていた。『うた日記』の詩「扣鈕」を佐藤春夫が書いたものだが、解説が付いてないせいか、碑面を読んでゆく人はあまりいない。

旧居の東隣には、石州和紙の手漉きを実演して見せる和紙会館が出来ていて、紙人形や文具類がぎっしり並んだ館内の売り場は、観光客でいっぱいだった。

一方、前回は閉館後で入れなかった郷土館の中は静かで、藩政史料や津和野出身者の遺品・遺墨などの展示をゆっくり見ることができた。鷗外や親類の啓蒙思想家西周をはじめ、国学者大国隆正、元老院議官の福羽美静、劇作家中村吉蔵、女優伊沢蘭奢、作家伊藤佐喜雄、ロシア語学者八杉貞利、童話界の功労者天野雉彦、話術の名手徳川夢声ら出身者の多彩さには驚かされたが、学者や芸術家は輩出していても、権力と縁のある政治家・官僚・軍人は少ない。津和野藩は四万三千石の小藩で、鷗外を引き立ててくれるような郷党の先輩はいなかったのである。

三十六万九千石の大藩長州藩の隣藩から出た鷗外は、晩年長州閥の実力者山縣有朋に近づいているが、結局のところ同藩扱いはされず、孤独な立ち場だったのであろう。

遺言の「死ハ一切ヲ打チ切ル重大事件ナリ奈何ナル官権威力ト雖此ニ反抗スル事ヲ得ズト信ズ　余ハ石見人森林太郎トシテ死セント欲ス　宮内省陸軍省皆縁故アレドモ生死別ル、瞬間アラユル外形的取扱ヒヲ辞ス……」という語り口の異様さは、心の拠りどころを中央に遠い郷里の小藩に求められなかった鷗外が、ついに志を得る場所のないまま、最後は石見人としてのアイデンティティーに回帰したためと見るべきではなかろうか。それは、遺言に薩長藩閥に対する抵抗の姿勢を読み取る説と一部重なる。

津和野再訪の締めくくりとして、三鷹禅林寺の墓と同様「森林太郎墓ノ外一字モホル可ラズ」の遺言通りに作られた永明寺の墓所に詣でた私は、鷗外の心情をそのように理解したいと考えていた。

（一九九一・九・二八）